

---

# まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

佐久紗府斉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まじこい！〜『闇殺し』の少年の物語〜

### 【Nコード】

N6703X

### 【作者名】

佐久紗府斉

### 【あらすじ】

ありとあらゆる暗殺術を極めた歴代最高の暗殺者の少年がいた。でも・・・「違う！俺は暗殺なんかしたくない！！」少年の叫びは閉ざされた道を破ることが出来るのか！・・・

簡単に言うとチート主人公がまじこいの世界で猛威を振るう（汗）物語です。

まじこいのキャラですが、どちらかと言うといったんばらして新しい小説風にしたい



プロローグ〈少年は暗殺のエキスパート！？〉(前書き)

ども、作者です。大して

原作を知りもしないのにやらかしてしまいました・・・

ッ更新はもう一つがメインですので遅めになると思います。

ではまずはプロローグから、どうぞ。(ノ。)

プロローグ少年は暗殺のエキスパート!?

ダアン!! 『バスッ!!』

ある男が頭をぶち抜かれ、大量の血を撒き散らしながら床に倒れ伏した。

俺はそれを見ている。……

自身が持っているスナイパーライフルのスコープから。

今俺がいるところは雑居ビルの屋上。標的のアジトから約五キロほど離れた高いビルだ。

本来ならそんな距離から狙撃をしても到底当たらない距離だ。

しかし俺はそれをいつものことのように難なくこなす。

他人が今の俺を見れば絶対びびるだろう。今の俺は完全な暗殺者モード。

目は鷹のようでも表情はとても冷たい。

「はあ……」

暗殺者モードから標準モードに『切り替え』、一息吐く。

俺の名前は「空裂 零斗」……変な名前だろ? ……

まあ今更変えようとも思わないが。

『ウラ』の業界に関わる者ならば知らない奴はいないだろうとまで言われている。

・・・らしい。

自分で言うのもなんだが若干十六歳にして狙撃・接近・『気』の総量、使い方等々・・・

全ての面で『殺し』の頂点に上り詰めた。

ナンバーワンだよナンバーワン。・・・はあ(；- -)(=3・  
・・・また溜息が出る。

今回依頼されたのは政府の重鎮・・・ではなく。とあるデカイ麻薬密輸組織の

リーダーを「やれ」と言われた。

依頼者はなんと・・・警視庁の上層部だけ？・・・黒いな警察も・・・(汗)

たまにこんな風に警察とかからも普通に依頼が来る。

・・・いくら捕まえ難いつつてもさあ・・・いいの？・・・

「・・・でも今はこうするしかないんだ。・・・標的の死亡を確認。  
ミッシェル・コンフリー  
任務終了だ。」

一瞬で俺の愛銃『L96 スナイパーライフル(通称レクロ) 零斗フルカスタム』を

バラし、でかいアタッシュケースに入れてごつい鍵をかける。

指紋、DNA情報を全て残さず『消し』、俺はビルを後にする。

夜の街を俺は歩いてうちに帰る・・・捕まる心配なんかねえ。五キ口先から撃つたなんて誰も気づかんし依頼者は警察側。捕まる要素ねえじゃん。

・・・ほんとに殺しなんかやりたくない。

俺だって高校生だ。友達と毎日馬鹿騒ぎしたい。恋だってしたい。今俺は川神氏の川上学園に通っている。・・・いるんだが。明日・・・いや、

今日から二年生だが。去年は一日に五件以上は殺しの依頼が来て授業になどぜんぜん出ていない。ごく稀に出てても「空裂くん。お電話です。」とまた殺せと命令される。ちょっと『もうやめて』的なことを言ったんで  
もう普通に授業出れると思うんだが・・・

空裂家は代々殺し屋稼業らしい。『全く、零斗は家の誇りじゃわい。』

とかじーさんも言ってたわ。何かいつの間にか他のやつらには『地上最強の暗殺者』とか言われて畏れられてるし・・・他の暗殺者に避けられるって

どうなのよ・・・まあこれも運命だと思って諦め・・・無いッツ!!  
殺し屋稼業からいつかは抜け出す!絶対!!・・・だってさあ・・・

違うもん！！こんなことしたくない！

「はあ・・・明日（今日）から二年生かあ・・・少しは『何か』が  
変わってくれと

いいんだけどな・・・」

俺の呟きは誰にも聞かれること無く深夜の闇に溶けていく・・・

プログラグ少年は暗殺のエキスパート!?? (後書き)

はい。プログラグ長いですね・・・

まあこれからもぼちぼち更新しますんで

皆さんぜひぜひ応援よろしく!お願いします!!

第一話 「新たな日常の開始？」 (前書き)

ども、作者の佐久紗です。

第一話が始まりました……が！

早速作者の『原作殺し（シナリオブレイカー）』が発動したようです……

二年になって初っ端から川神大戦です。ちなみに途中留学の

クリスとかは一年の時に留学イベント そのまま二年へ……

と言う流れです。原作の途中参加キャラはもういると思って下さい。

まあそれではカオスな本編をどうぞ。

## 第一話 「新たな日常の開始？」

「へ〜ここが川神学園かあ．．．って．．．もう一年間はここの生徒だったよ．．．」

学園の入り口でそんなことを一人ごちる。や〜っと来れたよここに．．．

そこかしこで生徒達がわいわいやっていた。が、俺には友達が当然いない。

少ないんじゃない。居ないんだ．．．

「はあ．．．もう教室．．．Fクラスだったか．．．行こ．．．  
．．．」そう言い、  
校舎の中に入った。

本人は気づいてなかったがその場のほとんどが零斗を見ていた。  
なぜなら．．．零斗があまりにも異質な気迫を放っていたからだ。

漆黒の髪は艶を帯び、少し癖っ毛が立っている。そして右のこめかみは

どす黒い赤に染まっている。ちなみに地毛。顔は端正でカッコいい  
ほうだが

話しかけづらい雰囲気をかもし出している。そして持ち物は普通の  
鞆と

いつでも『依頼』を受けられるよう、『レクロ』の入った大きくて  
ゴツイアタッシュケース

を持っている。制服は丈は同じだが袖などの幅がかなり広い。オー  
ダーメイドで

ピッタリだけどゆったり、という着流しのような格好でそれがまた  
男女問わず

注目を集めていた。

「ほう………」

そして、注目していたのは生徒達だけではなかった。たまたまそこ  
に居合わせた  
学園長までも、いや、学園長のほうがまじまじと零斗に見入ってい  
たのだ。

何故か。それは零斗から微量に漏れる隠しきれていない濃密な『気』  
だ。

量こそあるかないかの量だが何より質が尋常ではない。まるで触れればやけどをするような

濃い、ひたすらに濃い『気』。学園長はそれに魅入られたように零斗を見つめ……

「ほお……ほっほっ。面白い生徒がいるようじゃのう。」そう呟くのだった。

ある意味衝撃的なデビューを果たした零斗であった……

～Fクラスの教室～

「さつて、と席は……ここだな。」『レクロ』のケースを床に置く。

「ズゴンー！」と音がし、少し教室に振動が響いた。そう、俺の『レクロ』は普通のスナイパーライフルと比べて重量、大きさ、全てが規格外に出来ているのだ。

「ふう……っと！」席について皆が見ていることに気づき、机に伏せる。

「ははっ！やっぱ俺達是一緒だな！よろしくー！」「おう！

！」「うん！」

「そうね。」 「そうだな！」

そんな声が聞こえてきた。仲いいな……。「あ！あたしの席はここね！」

と、そこで隣に誰か座ってきた。「んあ？」誰だ？と顔を上げるとそこには……

赤っぱい髪の活気に満ち溢れたような少女がいた。

「あ、あたしは川神一子、よろしくね！」川神……ああ、川神学園……読めたぞ。

つてかこいつどっかで……あ。

「お前は……河川敷の……」

「……あ！もしかしてたまに河川敷でボーっとしてた人！？」

「……失礼な、あれはれっきとした修行だ。」

心を『無』にするための、な。心が無の状態だと第六感を著しく磨くことが出来るのだ。

しかしコイツ……純粋なヤツだな……心が洗われるようだ。

特に俺は人間の汚い部分をずっと見てたから余計に和む……

「でさ！あなたの名前は！？」

「……………空裂 零斗だ。」 「そう、よろしくね空裂君！」  
「……………」 「なんだろう、ここまで言われると黙るしかない。」

「つてか俺こんなに話すの苦手だっけ？ 環境とは恐ろしいもんだな……………」

と、そこで先生が教室に入ってきた。「全員席に着け！」 はいはい、着いてるよ……………」

「さて、私はこのFクラス担任の小島 梅子だ。まあ皆は歴史の授業で知っているだろう。出席を取るぞ。」

……………つてゆーかさ、何で出席って必要なんだろう。空いた席見れば分かるじゃん。

あと教師がガチの鞭を持つてるってのはシニールすぎやしないか？

これがほんとの「ガチムチ」なんつってwww…はい……………ごめんなさい……………」

「……………」 はい！……………」 はい！……………」 だんだんと呼ばれていつてる。

「空裂零斗」「ほい。」「……………あ。やっべ……………」

『ピシッ!』と一気に教室の空気が凍った……………気がした……………。

『ヒュビュン!』刹那、鞭の二撃が顔に迫ってきた。

だがこの程度のスピード、俺には止まって見える!

俺はダメージを殺し、その鞭を腕に絡めて一気に奪い取った。

「……………すみません。つい口が滑っちゃいました。」鞭を返しな  
がら言う。

「ツツ!……………まあ分かったのならいい……………さて、今日は  
重大な報告がある。」

驚愕の色を隠せてない先生。ん?なんだ??

「いざこざの続いていた二年FクラスとSクラスの件だが、」

……………ちょちょちょ!ちょっとまって!?まだ二年になってから一  
日もたつてないよ!??

「先生、まだ進級して一日目ですけど……………」誰かが言う。そ  
う、その通りだ。



人殺し以外で力を振るうのはひさしぶりだな。

「では、これで終わる。」梅子先生の話が終わり、休憩に入る。・  
と、

「く、空裂君凄いな！梅子先生から鞭を奪い取るなんて！！」何か川神が言ってきた。

なんだか興奮した面持ちだ。

「そうか。」と適当に返しておく。クラスの皆はととと驚いてはいるが

俺の話しかけづらい雰囲気ので話しかけてこないようだ。

願ったり叶ったり・・・・・・・・・・・・・・・・じゃねーよっ！

無意識に意識が孤独を選んでた・・・・・・・・。気をつけねーとな・・・・・・・・。

side 一子

私の隣の席は今までに何回か見たことのある人だった。でも面識は無いに等しいけど。

その人は河川敷でたまに呆けたように遠くを見ている人だった。

最初、その空裂君が隣の席に座っていたのを見た時は一瞬「うっ」とたじろいだ。

それはあまりにも近寄りがたく、「来るんじゃない」と言わんばかりの

冷たい気迫だったから。

それでも私は少しだけ勇気を出していつものように話しかけてみた。そして、

「んあ？」と、顔を上げた空裂君の顔を見て私はとても驚いた。

やはり人を拒絶するような雰囲気。だけどその目は人とのつながりを強く望んでいるような

寂しがり屋の子供のような切ない目で。

そして、さらに驚くことが起こった。ウメ先生の出席確認で空裂君は「ほい。」と

間の抜けた返事をしてしまったのだ。直後にウメ先生の鞭が飛んだ。でも、一瞬後には

鞭は空裂君の手に治まっていた。クラス全員が啞然とする。もちろん私も。

私にはウメ先生の鞭の動きすら見えなかったのに！

授業中も私は彼の横顔を眺めていた。すると、ときどき彼の表情がふいにフツ……と

曇る時がある事に気づいた。そのどれもが「やりきれない気持ち」や「後悔」と言うような

表情だった。

彼に何が起こったのだろうか。何が起こっているのだろうか。

もっと知りたい、そう思った。そして……もっと仲良くなりた  
いと思った。

このずっと孤独に耐えてきたような瞳をしている彼を支えてあげた  
いと思った。

私はファミリーの皆に、いろいろな人に支えられて楽しい『今』を  
送っている。

だから……今度は私が、この人の孤独をといてあげたい。

そう強く思った。

side out

第一話 「新たな日常の開始？」 (後書き)

はい。一子にフラグ(の様な何か)が立ちました？早いですね・・・

まあこっからは長々と駄文を書く予定です。

この原作の崩壊度にあなたは着いてくれるか！？WWW  
次はおそらく主人公紹介的な何かになると思います。

〜主人公設定〜（前書き）

ども。今回は主人公設定です。

零斗君はキモイぐらいのチートにする予定です。

最強だけど孤独・・・みたいなね？WWW

ではごーぞ。

## ～主人公設定～

### ～主人公設定～

名前

空裂零斗くわいれいとう

誕生日

十一月二十五日（本人は忘れかけている。）

容姿

端正な顔立ちだがどこか近寄りづらく、人を拒んでいる

雰囲気。

髪は艶のある漆黒の髪でちょっと癖毛。

髪型と顔立ちは『ガンダム00』の『刹那・F・セイエイ』を少しだけ幼くしたような感じ。

右のこめかみの一部に生まれつきの赤黒い髪が生えている。  
ちなみにこの赤黒い髪は特殊なもの。詳細はストーリーが進むにつれ明らかとなる。

声は普通の高校生の声だがやはり修羅場をくぐりぬけてきているだけあって

切れると誰もがびびるような迫力に満ちた声になる。

体型 背は普通。ほっそりとしているが無駄な肉が一切無く引き締まっている。

生い立ち 家は先祖代々『殺し』を生業としていて、物心ついたときから祖父に一流の暗殺者になるよう訓練された。先祖には忍びもいたらしく、回避術などは忍術の要素があるものも教えられた。

その内容はかなり鬼畜。

両親は物心ついたときにはもう亡くなっている。が、やはり両親も裏家業の人間だったらしい。

現在、『体人暗殺術』、『狙撃、銃器』、『気の総量、使い方』、そして

『状況把握、適応』、これら全てにおいて『歴代最高の殺し屋』の名を欲しいままにしている。

『暗殺者』モードに切り替えると表情が消え、戦闘力は減るが集中力や反射神経が爆増する。

『死の具現』などの二つ名も多々ある。

本人は幼いころ、「主要人物を殺すことでより大きな混乱を防ぐことが出来る。」

と刷り込まれ、それを信じてきたが今、『人を殺す』ことに疑問を抱き始め、

今では廃業して普通の高校生になりたいと強く望んでいる。

・・・が、幼少期から刷り込まれたことは簡単には抜けず、

戦闘自体は割り好み、戦闘中、ハイになってしまいそうになることもしばしば。

川神学園の二年生。一年生の時は以来を完遂するためにほとんど授業には出ていない。

制服は袖や裾の幅が広く、着流しのような感じで最大サイズを買った後で

丈を短くし、着流しのようなゆったりとしたものになっている。

理由がいつでも依頼を受けられるようにするものだと言うことは秘密である。

自分で稼いだ報酬で既に学園のすぐ近くの高級マンションの一室を借りて

一人暮らしをしている。

実家もそう遠くは無いが実家から逃げ出すことのほうが一人暮らしの目的。

家事スキルあり。

しかし実家から自分宛の『依頼』の電話は尽きない……………。

〈補足解説〉

『Lクロ』                    『L96・スナイパーライフル』の略で零斗の一番の愛用銃。

零斗専用のカスタムが施され最大射程距離が数倍に跳ね上がっている。

零斗の能力と組み合わせればほぼ無敵の銃。零斗の身長ほどもある。

いつもでかいアタッシュケースに入って、常に零斗のそばにある。

〜主人公設定〜（後書き）

はい、もう見るからにどチートオーラが漂ってます……

こっからひたすら原作をぶち殺して進むのでお覚悟を……

ちなみに禁書のパクリなんかごく僅かですがあります。

ではでは〜

第二話 「『表』と『裏』」 (前書き)

どもども、

今回は『表』と『裏』両サイドあります。

なにげに長くなりました。ではどうぞ。

## 第二話 「『表』と『裏』」

～授業終了後～

「……………なんだこれは……………」

授業が終わり、皆がぱらぱらと教室から出て行っている中、俺は配られたばかりの教科書を

呆然と見ている。まあ最初の授業と言えども余った時間で少し内容はやったわけで……

……………コレハナンダ？高校数学ってこんな鬼畜な内容だったか！？

まず数学、圧倒的に分からん。もはや揺るぎ無いほどの不可解さ。

英語、これも全く分からん。日本語もちゃんと理解して無い奴がいるのに

なんで外国語に手を出す！？もっかい鎖国してまえ！！

国語、まだいい、しかし俺の『まだいい』は常人が若干ヒクレベルである。

ゆえに決して侮ってはいけない。

これらのことから導かれた一つの答え……………それは

「……俺は勉強が出来ない。(通称はない)」

「……なんだ？この半年の間に何があった！？俺が『仕事』に専念してた間に！一体！何が！起こった！？あん！？」

「……駄目だ。(ありとあらゆる意味で)オウチニカエロウ……。」  
完全に勉強面を捨て、ふらふらと教室を出ようとした時、

「ねえ、空裂君！一緒に帰ろ！？」

「……やけにテンションの高い声がかげられた。

ああ、川神か。

「別に構わないが……。」  
「コイツは珍しいな。何で絡んでくる？」

「……いや、むしろ嬉しいけど。スゲー嬉しいけど。」

「ほんとに！？じゃあ帰ろう！！」  
テンションMAXになってやがる。

「……。」

と、何か後ろから妙な殺気を感じた。微量だが。極々微量だが。

「何でそんな奴と一緒に帰るんだ一子？」

俺を睨んでいた内の一人が川神を説得しようとしている。

まあ俺ははたから見れば『何考えてるか分からない奴』だろーからな……

……誰これ……確か……

「直江……大和……だったか……」

明らかに頭脳派なやつだな。彼のお仲間と思われる数人と一緒にこちを警戒している。

「ああ。お前は空裂零斗って言ってたな。」

明らかに不審者を見る目だ。……おい、流石に傷つくぞ？

「なによ、イーじゃない別に、隣同士なんだし。」

と川神が言つと

「そんなわけの分からねえ奴と帰るよりファミリーで帰ろつぜ。」  
直江も言い返す。

「ファミリー？……」

「まあ昔からの遊び仲間のようなもんよ。」一子が説明してきた。  
なんだよ……

『ファミリー』って聞いて真っ先に出てきたのがマフィアのヤクザで言つ『組』

って言う方のニュアンスだった。俺ももう大概やばいな……

「隣同士、気まずいままじゃ居心地悪いし、今日は空裂君と帰るわ。いいでしょ？」

空裂君？」

「あ……ああ。」断る理由も無いのでとりあえず一緒に校舎を出て、道を歩く。

ちなみに教室を出る時に

「あんなわけ分かんねえ奴と一子を近づけて大丈夫か？」とか

「ああ、まあどうせ一子も聞きやしねーんだしな。……でもそれで一子に

なんかあつたら俺は迷わずあいつをぶん殴る。」

つてな声が聞こえた。

「おお、大和、殺気が……」とか奴のダチであろう筋肉男が言  
つてたが

俺としては「はあ？誰に向かって言ってるんだア？（笑）」って感じ  
だ。

二人で学校から一緒に帰る。ああ、なんかこんな日常っていいなあ。  
……そんなことを考えながら歩いていた俺。しかし……

(……気まずい。)

うん。メツチャ気まずい。どーしよ……

「えつとね……改めまして！川神一子だよ！明日からもよろしく  
ね！」

あ、『一子』って呼んでね……！」

なして自己紹介？……こいつも案外テンパっているんだろーか。

「じゃあこつちも改めて、空裂零斗だ。『空裂』でも『零斗』でも好きに呼んでくれ。」  
ただし殺しの二つ名はダメ、ゼツタイ。

なんやかんやで地味に話をする。ってか人とかうやって話すの久しぶりー(、。、)。

と、その時。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど、その超ゴツイアタッシュケースは何？」

「!!!!」「やべー！」

「見るな触るな触れるな話を出すな。これはパンドラの箱だ。」  
嘘はついてないよ？

「わ、分かったわ・・・誰にでも知られたくないことのーつや二つあるもんね・・・」  
・・・俺の場合ーつや二つどころじゃねーけどな・・・

「悪い。でもこれはどーしても言えん。」  
言ったらもう俺の学校生活は終わる。オワタ的な意味で。  
もしバレたら誰も寄り付かなくなるだろーな。

・・・隣で笑ってるこいつでさえも・・・

「・・・零斗、どうしたの？」あ、顔に出たか。

「い、いや、なんでもない。」慌てて答える。そこで会話は途絶え、沈黙が場を支配する。

そこで俺はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「なあ、何であの時俺に声をかけた？俺の事はまったく知らなかったろ？」

すると、川神・・・いや、一子はクスツと笑い、

「だってさ・・・零斗・・・一人で寂しそうだったんだもん！」

「!!!」・・・驚いた。初対面だったのに・・・

「そんなにか？」

「うん。俗に言う『ボツチ』ってやつね。」

「・・・」

事実だ、事実である。俺は確かにずっと『ボツチ』だった。でも、そのことを指摘してくれた奴はコイツが始めてだ。

俺はそのことにちょっと嬉しい気持ちになる。

と、その時。

「~~~~~!!!!~~~~~!」 ポケットに忍ばせていたケータイが振動を伝える。「!!!!」

「あ、どしたの？メール??」川神が聞いてくる。本来ケータイや不要物は持ち込み

NOなのだがFクラスにそんなルールを守ってるやつはいない……  
だろ。

メールを開く。と、そこには……

空裂零斗に 教の武装派テロリスト集団『××・×××』のり  
ーダー、

『……』の殺害を依頼する。報酬は百十五万。

現在この川崎市に潜伏中……

やっぱりだった。『依頼』だった。その後には標的の顔写真と現在の  
潜伏予想場所、

その他もろもろがびっしりと書き込んであった。依頼人は

『裏』の日本治安維持組織（裏ギルド）からだ。

一件穏やかに見えるこの国にも『裏』がある。ここなんか代表例か。

「名指しかよ……有名なこと……」思わず呟く。

「零斗??」不思議そうに一子が聞いてくる。

「っと!わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」

「……分かったわ。じゃあまた明日ね!」  
ちよっと残念そうな一子。スマン。

だが、こっからは一般人は立ち入り禁止。

『裏』での戦いだ。無論こいつに危険を負わせるなんて考えたくも無い。

こうして俺は『裏』の世界へと今日も駆けてゆく。

～一子side～

今日は思い切って一緒に帰ろうと零斗を誘ってみた。ファミリーの邪魔が入ったけれど、

零斗は『構わない』と言ってくれた。なんだか妙に嬉しかった。

帰る途中には、結構話が出来た。思ったより零斗はよく喋った。

アタツシユケースに触ろうとしたら怒られちゃったけど……

そしてさりげなく自己紹介をして、な、名前を呼んで欲しいと言ってみたノノノ

驚くほどあっさり承諾してくれた。その後もいろいろと喋りながら帰っていたが

ふいに零斗のケータイがなった。そして

零斗の表情が変わった。表情の無い、冷たい顔に。

「っと！わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」零斗が突然言ってきた。

・・・表情を消した顔のまま。

「・・・分かったわ。じゃあまた明日ね!!」

なんとかさういったものの、私の心は心配でいっぱいだった。

零斗の背中が薄暗闇の中に消えていく。私はそれを、言いよつの無い不安感を

抱きながら見つめていたのだった・・・

side out

俺は今、標的の位置から五キロの位置に『Lクロ』を構えている。

標的の場所はメールに書いてあった位置と自分の推理で割り出した。

窓際にいる標的そっくり、と言うか本人の頭に照準をあわせ、  
レティクル

一気にトリガーを引く。(バシューン！) 風によるブレも全て計算  
しつくされた弾丸は

一寸の狂いも無く、標的の頭を射抜いた。

「標的の死亡を確認。ミッションコンプリート。」そう呟き、『い  
つものように』

Lクロを収め、後始末をする

まただ。また殺した。いつまで殺ればいいんだ。

一刻も早くこんなことはやめないと。

いったん家に帰ったとき、電話でじいちゃんから「もう『裏ギルド』  
以外の依頼は  
受けるな。」と言われて少しは前進したか、と感じた。

『裏ギルド』からの依頼は基本治安維持目的だからな。

殺るのは必然的に死刑級かつ国際級の犯罪者に絞られるが……

でもまだだ。俺は『人殺し』をしたくないんだ。

絶対変えてやる、俺の人生を。

そう呟き、俺は陣取っていた廃ビルを後にし、

一人真夜中の闇に溶けていった・・・

第二話 「『表』と『裏』」 (後書き)

どうでしたか？零斗は少しは人を殺さなくて良くなったようですね。

次回からは川神大戦かな〜とか思ってます。

時間軸わやですが……では〜。

第三話 「開戦！」（前書き）

ども！始まりました川神大戦！！

はっきりいって主人公がどこまでチートかを

見せる目的もありますので頑張って書きたいです！

ではどじろー！

### 第三話 「開戦！」

一週間後、いや六日後、丹沢山地

さて、ついにこの日が来た。

ちなみにこの六日はほとんど登校しなかった。何か『裏ギルド』とかの

登録に時間がかかった。

どうやらあの日の依頼はランクを決めるテスト的なもんだっただらしい。

人名使って技量テストなあ・・・まったく反吐が出るぜ。

結果は『ランクEX』。

・・・そりゃ通常の射程の五倍の距離から撃ち抜けりゃ当然ってもんか。

つてか『EX』は俺一人しかいないらしい。

裏ギルドの事務所（川神支部。場所は教えん。）に行ったら

そりゃあ喜ばれた（そして恐れられた）・・・ぜんぜん嬉しくねえよッ！！

でもこれで暗殺依頼は相当少なくなるな。ランク相当の依頼が来るようだから

依頼件数は激減間違いなし！また一步前進したな！！



ちなみに『気の無い返事をする俺。』とか言いつつ実際この戦いを  
すげえ楽しみにしてた俺がいた……いや、いる。

だつてさ！正面切つて闘えるんだぜ！？

いっつも遠くとか死角から一撃必殺で殺つてたからさあ！！  
狙撃とかけっこう空しいし！

しかもレプリカなら武器（暗具）OKと来たもんだ。最高じゃん。  
俺の愛用の武器で『接近して』、『殺さずに』闘えるんだ！……  
ここ重要。

え？愛用の武器が何かって？

Lクロ？違うわ。つまらんだろが。

拳銃？承認されんわWWW

刀？違う。小太刀も違う。だいたい小太刀とか刀は暗具じゃねえ。

まあ使うときに分かるさWWW……そこ！『えー！』とか言う  
な！！

テンションがおかしい。人を殺すのは大嫌いだが純粋な戦闘は結構  
いや、大好きです。

これが『刷り込み効果』つてやつですか？……



「「「「「うおおおおおー!!」「」「」「」……え？」

「ほら！零斗もいくよ!」「……待て待て待て待て待て待て待て!

え、こいつら馬鹿なの!？」

「アホか。今から走ってついたら交戦するときにはもうへとへとだったの。」

ぶつかるとまでは最小の力でいく。ぶつかった時に本気を出せるよーにな。」

「「「「「た、確かに!!」「」「」「」

一子に言ったはずの言葉に先陣の全員が(。 ; )みたいな顔で固まった。

「……さすが零斗ね!」「見直したぜ!」「今まで変な目で見てスマンかった!」

そして何故か好感度が上がった……おい。大丈夫なんかお前ら……

後最後のやつ、どつゆつことだ?ああん!？」

「はあ……じゃあ競歩ぐらいのペースで行こうぜ。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

こうして俺は何故か皆の好感度と士気を上げ、敵陣に向かうのだった。

「しばらくして」

「見えたぞ！！突っ込め！！」 先頭で進んでいた一人が声を上げた。

見ればかなりの大部隊がこっちに歩いて、いや、走ってきていた。

こちらも一気に走り出し、あっという間に交戦状態となった。

「じゃあさ、一緒に行こうよ零斗！！」一子が話しかけてきた。

「おう、でも俺は走らない。手柄に焦ってる奴はたいてい死亡フラグを立てるからな。」

「……………分かったわ。一緒に歩いていく。でも……………零斗……………」  
「ん？何だ？」

「死なないでね。」

一子に見事に言い放たれた。



もするかのように  
相手の本陣へと向かう。

『はあっ！』『せえい！！』『おりゃあっ！』

三人の生徒が三方向から突っ込んでくる。・・・が、俺から一定の範囲内に入った瞬間

『ドサア・・・』と倒れていく。

「はあああああっ！！」 声が聞こえたのでふと見ると一子が薙刀で一気に二、三人を吹き飛ばしている。・・・www・そんな大振りじゃもたねーぞオー！！

二十分ぐらい経っただろうか。徐々にこちらが押されてきた。こちらの士気は十分だがあちらは数が半端ではない。次から次へと増援がくる・・・ちょっと多すぎね？

クラスメイトを見ると、数は半分ほどになり、誰もが疲れきっている。

・・・限界か。

「はあ……はあ……数が多すぎるっ!!これじゃいつかやられちゃうよお〜。」  
一子も肩で息をしているな。

「皆、一旦撤退しろ!!」 Fクラスの『源 忠勝』だったな……  
が叫ぶと同時に  
皆蜘蛛の子を散らすように撤退していく。いい選択だ。

……さーて、本番はこっからだな(ニヤツ)  
ポケットに手をつ突っ込み、迫ってくる大舞台の前に立つ。

「!零斗!撤退よ!!」一子が言ってくる。が、  
……はあ?こっから楽しくなるんだろーが!

「お前は撤退してる。俺は進む。」「む、無理よ!!一人で!」

「無理じゃない。」即座に言い放つ、と一子は

「む~~~~~!!だったら私もいくわよ~~~~!!」

ちょっと迷った後でこっちについてくることを選んだ。

そんな一子を見て、理由は分からないがなんだかちょっと嬉しくな

った。

「ふふ………だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」  
俺が言つと

「!!!／／零斗……零斗が笑ったあ！」 はい？

気づいてなかったがいつの間にか俺は微笑んでいたらしい……  
つと！

「さて、話はこんぐらいにしよう。どこまでいけるかやってみよう  
じゃんか。」

「うんっ！」 満面の……なぜかすごくいい笑顔で頷く一子と

「さーて、いくぜえー！（黒笑）」 またなかなかアブナイ笑みを  
浮かべる俺。

目の前には大部隊、対してこっちは二人、はたから見れば絶望的な  
闘いが  
幕を開けた。

く一子sideく

今日の零斗はなんだかとても機嫌がよさそうだった。  
ぜんぜん学校に来なかったから心配してたけど別に体調も悪いわけ  
ではなさそう。

体操服を忘れてなお機嫌がよさそう。なにかいいことがあったのか  
な？

隊列を組む時、思い切って「一緒に行こうよ！」と言ってみた。・  
・と

零斗に（）。こんな顔をされた。なによ、そんなに私と行き  
たくないの！？

ちよつとシヨックだった。そして大戦は始まり、先陣の零斗の提案・  
・と言つか指示で  
私達は歩いて進軍した。

そして乱戦状態になり私は思いつきり力を振るった。

薙刀を振り回しながらふと零斗の方を見ると、敵の一人がちょうど  
木刀を零斗に  
振り下ろそうとしていた。零斗は手足の力を抜き、だらりとした格  
好で歩いていた。

「ッ！！！」声すら上がらない、そんな手遅れともいえるタイミン  
グ。

でも、気づいた時には相手の鳩尾に零斗の拳がめり込んでいた。

……見えなかった。特に構えもモーションも無いのに食らった相手は一瞬で意識を刈り取られたようだった。

……強い。

しかもたぶん、ううん。確実に零斗は手を抜いている。完全に未知数の技量。

……知りたい。零斗の全力を知りたい。そう思った。

しばらくすると、こっちが数のせいでかなり押されてきた。自分もかなり疲れた。

「皆、一旦撤退しろ!!」　ゲンさんが叫ぶ。それを聞き、皆がわらわらと撤退していく。

そんな中、零斗だけは一步も退いていなかった。

「零斗！撤退よ!!」　そう叫ぶ。でも、

「お前は撤退してる。俺は進む。」　零斗は全く動じなかった。だけどー!

「む、無理よ!!!一人で!」一人で行ったらいくら実力があっても戦死は免れない。

姉さま級の実力者で無い限り。零斗が死ぬのは絶対にやだ。なのに、なのに。

「無理じゃない。」零斗は即座に言い放ってくる。もう、全く聞かないんだから!!

「む~~~~~!!だったら私もいくわよ!!」

迷った拳句零斗についてくることにした。

すると……

「ふふ………だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」

零斗が笑った。とても優しい微笑を浮かべている。零斗のこんな顔、始めて見た……

他人の前では絶対に出さなかった笑顔、それを自分に向けてくれたと思うと、

とても嬉しくなった。と同時に零斗の「守ってやんよ」というセリフにちよつと  
どきどきしてしまった。

「さて、話はこんなふうにしてしまおう。どこまでいけるかやってみよう  
じゃないか。」

自信満々に言う零斗。はっきりいって無謀だ。でも、

・・・零斗と一緒に出来るかもしれない。

そう感じ、私は・・・

「うんっ！」と満面の笑みを返すのだった。

第三話 「開戦！」（後書き）

どうでしたか？まだまだ零斗君は本気を出してません。

武器も何か分かりませんし・・・

・・・次回にご期待を！・・・ねむ・・・

でふぁでふぁ・・・zzz・・・

第四話「大戦中盤 打ち解ける心」(前書き)

どもども！作者です。

今回は零斗君がクラスの輪に入る話です。

ちょっと不自然なところもありますがそこは暖かい目で見ていただきたい……(m|m)

ではござ。

#### 第四話「大戦中盤 打ち解ける心」

「はああっ!!」

「ふっ!!」

俺達は今、敵の増援部隊のど真ん中に居た。三百六十度敵である。否、的である。

ふははは!! 武道を少しかじった位で俺にかなうと思うてか!!

「おい一子、そろそろ疲れたんじゃないか?」

「……………まだまだ! はあああ!!」 一子が叫ぶ。  
……………それじゃ疲れてるのが丸分かりだぜ? ……

ちなみに俺は息すら上がっていない。暗殺術ってのはいかに最小の力で効率よく

ダメージを与えられるか、だからな。

実際今までの敵は全て首か鳩尾にキめてますから。

そうこうしているうちにあたりの敵は皆、屍(偽)へと変貌した。  
おお、一子も頑張ったな。

ちなみに現在の位置は半分よりちょこっと相手陣よりだと思つ。

「さつとと。休憩だな。」

「は〜・・・めちゃうちゃハードねこれ・・・」　一子がぼやく。

「いいのか？今ならいつでも退けるぜ？」　ちよつとからかってみる。

「・・・やだ。私もどこまでやれるか試したいし。」

「よし、その意気だ。」・・・お、次が来たか。

向こうからSクラスの新手が来た。数は・・・まあまあ居るな・・・

・・・つと、今回は武将（的な奴）が居るんだな。

相手軍が近づいて来た。・・・運ばせてないで歩けよ・・・戦争だぞ？？

しかもなんだあの、んー、派手な浴衣的なのは・・・ここは祭りかつつーの。

・・・舐めてんの？え？舐めてんの？

「・・・ん？・・・敵・・・ふん！二名だけか。構わん！蹴散らして進め！！」

「で、ですが心様・・・奴らはここまで二人だけで進んできたようですが・・・」

「構わぬ。我が負けるなど絶対にありえぬのじゃ！！」

「ここからは行かせないんだからっ！」　一子が薙刀を構える。

「ふん、庶民ごときが我に勝てるとても思っているのか！」  
「やな奴だな心様とやら・・・」

「勝てる！いつぱい努力してきたもん！（それに・・・零斗も居るし・・・）」

「??最後の方が急に小さくなったな・・・」

「は、何を言い出すかと思えば。努力？そんなものしたところで高貴なる我に

勝てるはずが無かろう！！」 明らかに人を見下した表情。それを見て俺は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（プツッ！）とまではいかないが半切れ状態に進化した。

「なっ！だったら見せてやろうじゃない！」 一子が走り出そうとしたが、

「待ってくれ。ここは俺一人にやらせてくれないか。」 それを片手で一子を制する。

「！！だって！」 「いいから。遠くで見てろ。」 そう言い残し、俺は

両の手をポケットに突っ込んだまま敵の軍勢の中に歩みを進めた。

「ふん。一人で来てなんになるのじゃ（笑）、かかれい！！」

一気に全軍で襲い掛かって来る。

だが。

「バタバタバタッ！」 最初に襲い掛かってきた五人は一瞬の後に全員地に倒れ伏した。心様があっけに取られてやがる・・・あ、一子もだった・・・

全員の首筋にはレプリカの刺し傷（まあすぐに無くなるだろう）。  
・・・そう。ここに来て俺は自分の武器を使った。

ポッケから抜かれた俺の右手にはキラリと光るものが。

それは・・・全長十五センチかそこらの『矢』だった。

・・・『打ち根』。投げずに使う刺突用の矢で『世界最小の短槍』と呼ばれる代物。そして俺の愛用の武器。

切れないが刺し味は度を越えて鋭く、最小の動作で敵を死に至らしめる暗具である。

・・・これはレプリカだが。

そのままゆっくり心様の前まで歩いてゆく。俺の通った道のりをなぞるかのようにな  
バタバタと人が倒れていく。

すれ違い様に一刺。返す刀（？）で反対の敵を一刺。

戦力の半分ほどを殺った時にはもう半分の生徒も『恐怖』から完全に沈黙していた。

とうとう静まり返る戦場。

その中を俺はゆっくりと、『心様』の元へと歩いてゆく。

「ひいいい……来るな！」 顔を真っ青にしておびえる心様。  
そしてそんな心様に俺は告げた。

「おい……死にたくなければ一子に謝れ。」

「！~~~~~（ギンツ！）（ごめんなさいごめんなさいごめんなさい~~~~~！）」  
心外そうにしていたので一睨み聞かせてやると素直に謝った。最初からそうしろ。

「そしたらさっさと行けよ……行けよッ！！」 叫ぶ。

「ヒッ！……撤退じゃ！急がなか！」 怒鳴り散らして心様は退場して言った。

「……」 俺が誰も居なくなった戦場で沈黙していると、

「……あ、ありがとね零斗。こんな私のために怒ってくれて……」

「一子が何やらぐいによいによいと言ってきた。」

「まあ気にすんな。」そう軽く言ってから、

「それに・・・俺も努力してんだ。」と続ける。

「！！・・・そうだよな。努力を否定されるのは嫌だもんね・・・」

「・・・二人して黙ってしまつ。いかん、気まずいぞ・・・」

と、・・・???おかしいな・・・前方に敵の本陣が見えるぞ???

「・・・疲れてんのかな、俺・・・」そう呟くと、

「違うわよ!!」一子、ナイス突っ込み。分かっていますって。

「チツ・・・まさかここまで来てたのか。・・・!弓兵まで揃えてやがる。」  
「つてか・・・届くぞこりゃ・・・」

「弓兵、前へ!!」

そう思っていると弓兵を仕切っている軍人（？）的な奴が指示を出した。

刹那、空に一斉に放たれた矢がこちらに飛んできた。正直二人に対してこの矢の量は無いと思います。ハイ。

「でえやあああああああ！！」一子が薙刀で矢を弾き飛ばす。俺はというと・・・

「よっ！ほっほっ！っとお！」

矢と矢の隙間に入り、足さばきで矢をかわしていた。

基本俺は『受け止める』ってことをしないからな。その方が速いし・・・だけどこのままじゃジリ貧になっちまうな・・・そう思っているよ、

相手の弓兵が急に全員倒れた。矢の飛んできた方向を見ると・・・岩の上に一人の少女が立っていた。・・・椎名京だったな。

「京！！」一子が叫ぶ。

「っ！！狙撃主を狙え！」 矢が椎名に向かって放たれるが無論そんな距離では届きやしない。

「そんな弓じゃ届かないよ?」

そついい、椎名は弓を放つ。弓は着弾(?)すると同時に爆風で残った弓兵を一掃した。

「……あれ?矢で爆風っておかしくね??」

「私のは狙撃用の弓だから何でも射抜くよ!……いつかきつと大和のハートも……(照)」

「……ツッコミどころが多すぎる……とりあえず一つ言っておくと」

それは『射抜く』って言いません!見ろ!黒煙上がってんぞ!?

「京だけじゃねえぞお!」

声がかげられた。振り返ると……大量の自軍がこっちに押し寄せてきていた。

「……そーだ。ほとんど戦力使ってねーじゃん。」

「いやあ……まさか生きてたなんてなあ。ゲンさんが『あの二」



「出陣したら戦死をもちとわぬ精神……まさに武士だな……」

「いや。戻るのがたいぎかったんだって……」

『クリステイアーネ』や風間、筋肉男……否、島津達や

Fクラスの奴らが次々に劣ってくれる。そして……

「全く、こっちの戦略をぶち壊しやがって……」 直江もなんか  
言っています。

「……まあ結果オーライって事で……（汗）」  
反省はしてない。

「そうだな……お前が居なかったらこの戦、勝てなかったかも  
しれないからな……」  
そう言い、直江は続けて、

「……いままで変な目で見てすまなかった、許してくれ。後、  
これからはよろしくな！」

そついい、手を差し出してきた。周りを見ると、皆頷いたり口笛を

鳴らしたり

拍手をしたりしている。……この全員を代表してって事か。

……やった！やったぜ！これで晴れてクラスの一員って事だな！？

「……おっツー！」　そっいい、俺は直江の手をがっちりつかんだ。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」　歓声上がる。それは……

俺がこのクラスに『認められた』瞬間だった。

第四話「大戦中盤 打ち解ける心」（後書き）

はい、キモイぐらいのチートですね……

でも次回ではさらに化け物化すると思いますので……

口調とかが不自然に思える人が居たらごめんなさい……

良かったですね零斗君！残るは殺しをやめるだけです……！

……たぶん……

あ、『打ち根』は禁書をパクってます……

分かるかな……

では次回もお楽しみに……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6703x/>

---

まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

2011年10月26日03時04分発行